

開演	6月1日(土)	開演	6月2日(日)
13:00	<b>プログラム A</b> アトムの足音が聞こえる 14:22終映 アフタートーク	13:00	<b>プログラム D</b> 世界は恐怖する 京都文化博物館所蔵 14:19終映
15:30	<b>プログラム C</b> 裸の島 京都文化博物館所蔵 17:06終映	15:00	<b>プログラム B</b> めもりい、ゼロの発見 土くれ、猫の散歩 国立映画アーカイブ所蔵 16:14終映
17:30	<b>プログラム B</b> めもりい、ゼロの発見 土くれ、猫の散歩 国立映画アーカイブ所蔵 18:44終映	16:45	<b>プログラム A</b> アトムの足音が聞こえる 18:07終映

※開場は開演の10分前 ※プログラムは変更になる場合がございます。

料金

プログラム A / プログラム B

一般 (シニア含) 1,500円 大学生以下 1,000円  
 文博友の会会員・障がい者 1,000円

- ・PassMarketにて一般、学生チケット販売中
- ・文博友の会、障がい者の方は、当日京都文化博物館3階受付にてお求めください。
- ・文博友の会、障がい者の方は3階受付にて会員証、障がい者手帳をご提示ください。

プログラム C / プログラム D

一般 500円 学生 400円 (京都文化博物館総合展示室入場料)

- ・高校生以下、文博友の会会員、障がい者は無料
- ・チケットは京都文化博物館1階受付にてお求めください。
- ・高校生以下、文博友の会、障がい者の方は3階にて学生証、会員証、障がい者手帳をご提示ください。

アフタートーク



6月1日のプログラムA終映後、富永昌敬監督をお迎えしてアフタートークを開催します。※プログラムAの料金が必要です。

富永昌敬 Masanori Tominaga

1975年愛媛県生まれ。映画監督。近年のおもな作品は『白鍵と黒鍵の間に』(2023)、FODドラマ『僕の手を売ります』(2023)、『素敵なダイナマイトスキャンダル』(2018)、『南瓜とマヨネーズ』(2017)など。

主催 | Brand new day 共催 | 京都文化博物館

協力 | 国立映画アーカイブ、グリオグループ、手塚プロダクション、隆映社、桜映画社

特別協力 | まつかわゆま、田中晋平、Team OHNO(西原多朱/遠藤正章/小林秀野/RUBYORLA/由良泰人)、TAPETUM WORKS、二瓶晃

問い合わせ先 info@brand-newday.jp

Brand new day  
<https://brand-newday.jp>



アクセス

京都文化博物館

京都市中京区三条高倉 075-222-0888



- 地下鉄「烏丸御池駅」下車 5番出口から三条通りを東へ徒歩3分
- 阪急「烏丸駅」下車 16番出口から高倉通りを北へ徒歩7分
- 京阪「三条駅」下車 6番出口から三条通りを西へ徒歩15分
- 市バス「堺町御池」下車徒歩2分

Designer: Akira Nihei

# 大野松雄の仕事 feature in sound

戦後、若き日々に「音」の仕事積み重ね、多くの仲間とともに新しい時代を切り開き邁進した人生を終え、2022年に旅立った音響デザイナー・大野松雄。大野が出会った人々との「仕事」を通して、時代を感じ音を体感する――

世界は恐怖する 死の灰の正体 1957 / 裸の島 1960  
 猫の散歩 1962 / ゼロの発見 1963 / めもりい 1964 / 土くれ 木内克の芸術 1972  
 アトムの足音が聞こえる 2010

※制作年順

2024年6月1日(土)・6月2日(日)

会場 = 京都文化博物館 [3F フィルムシアター]

<https://www.bunpaku.or.jp/>

Brand new day



## アトムの子音が聞こえる

2010年 | 82分 | カラー | BD  
 配給：グリオグルーヴ

監督：富永昌敬／ナレーター：野宮真貴／音響効果：パードン木村／撮影：月永雄太・富永昌敬／助監督：原田健太郎  
 出演：大野松雄、柴崎憲治、柏原満、松田昭彦、Open Reel Ensemble、村上浩、由良泰人、レイ・ハラカミ ほか

国産初のTVアニメーションとして、半世紀を超えてもお世界中で愛されている「鉄腕アトム」。そこから生まれた“あの音”をつくった大野松雄の半生を描いたドキュメンタリー。「鉄腕アトム」放送時の顛末から、その功績と後世に与えた影響を紐解きその波乱の人生を追うのは、『乱暴と待機』『パンドラの匣』『白鍵と黒鍵の間に』の富永昌敬監督。

手塚治さんとの“ケンカ”を楽しそうに話してくれた大野は、後年「鉄腕アトム」をやったおかげで多くの人に知ってもらった。手塚さんとは一度はケンカ別れしちゃったけど結局呼び戻してくれた。本当に感謝をしている。あの世に行ったら「あの時はありがとう」と言いたい」と話していました。  
 6月1日、富永昌敬監督をお招きしてアフタートークを開催します。大野との出会い、撮影時のエピソードなどうかがえます。

## 裸の島

1960年 | 96分 | モノクロ | 35mm  
 近代映画協会 京都文化博物館所蔵

製作：松浦栄策／製作・監督・脚本：新藤兼人／撮影：黒田清巳／音楽：林光／効果：大野松男／録音：丸山国衛／編集：榎寿雄／照明：永井俊一  
 出演：乙羽信子(トヨ)、殿山泰司(千太)、田中伸二(太郎)、堀本正紀行(次郎)、尾道放送劇団 ※スタッフのクレジット表記は当時のままです。

本作は近代映協が経営難により解散するかどうかという瀬戸際に最後の賭として企画された。製作費は新藤監督の個人出費500万円のみ、スタッフは僅か13人、プロの俳優は近代映協同人の殿山泰司と乙羽信子の2人だけで、他は現地の人に出演をお願いするという態勢で製作された。



©グリオグルーヴ

## 世界は恐怖する 死の灰の正体

1957年 | 79分 | モノクロ | 35mm  
 日本ドキュメントフィルム 京都文化博物館所蔵

製作：大野忠、井上猛夫／監督：亀井文夫／撮影：菊池周、藤井良孝／音楽：長沢勝俊／効果：大野松雄／照明：久米光男／録音：大橋鉄也、奥山重之助／解説：徳川夢声／協力：山崎文男(科学研究所)、道家忠義(立教大学助教授)、斎藤信房(東京大学教授)、三宅泰雄(気象研究所)、江川友治(農業技術研究所)、山県登(群馬大学助教授)、宮川正(東京大学教授)、清水健太郎(東京大学教授)、浅利民弥(日本検査株式会社)、渡辺漸(広島大学教授)、村地孝一(立教大学教授)、森脇大五郎(東京都立大学教授)、三村卓雄(東京水産大学教授)、小坂部勇(東京水産大学教授)、山下久雄(国立第二病院)、林一郎(長崎医科大学教授)、石井千尋(気象研究所)、伊東彌白(気象研究所)、田淵昭(広島大学教授)、武谷三男(立教大学教授)、草野信男(東京大学助教授)、広島原爆病院、日本放射性同位元素協会、オリエンタル写真工業株式会社／原爆の図：丸木位里、赤松俊子

1956年、亀井文夫監督は、わが国に原爆が投下されて十年目にあたる1955年に広島で開催された第一回原水爆禁止世界大会にあわせて、被爆者救済運動の一環として『生きていてよかった』を企画。「死ぬことは苦しい」、「生きることも苦しい」、「でも生きていてよかった」の三部構成で、原爆による肉体的傷と、常にさらされる“偏見”に

大野が参加するきっかけになったのは、音楽を担当された林光さんからの「音をやってもらえないか」との1本の電話だったそうです。撮影現場に実際に行き、そこに「在る」さまざまな音を録り、新藤兼人監督に聞いてもらったところ「すごくいいよ！これだ！」ってとても喜んでくれたんだよね」と、とても楽しそうに話していました。

# 大野松雄の仕事 feature in sound

官公庁や企業などが、公益性の高い社会問題の周知や、あるいは商品の宣伝などを目的として作られた映画。戦後、多くの分野でさまざまな作品が作られました。大野も数多くのPR映画に携わりましたが、今回その中から2本上映いたします。

多彩なジャンルで「音の仕事」に関わった大野。よく言っていたのは、「自分から」営業をしたことはいんだよね。どこから誰かが声をかけてくれる。それが面白そうならやる。そうしたら楽しい仕事になるんだ」

## 猫の散歩

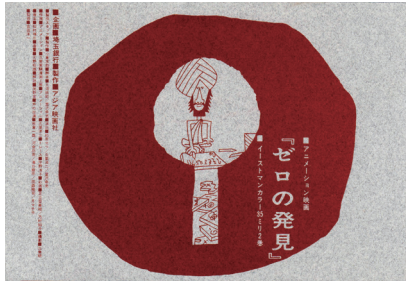
1962年 | 26分 | モノクロ | 35mm  
 桜映画社 国立映画アーカイブ所蔵

文部省選定・厚生省推薦・東京都教育委員会選定  
 企画：中外製薬株式会社／製作：桜映画社／監督：山本嘉次郎／原案：上田忠信／脚本：岡野薫子／監督：大橋秀夫／音楽：大野松雄／解説：高橋和枝



©桜映画社

ノラ猫がみた、都会の住宅地の環境衛生、ゴミ問題はいつの時代も頭の痛い問題。



©Brand new day

## ゼロの発見

1963年 | 24分 | カラー | 35mm  
 国立映画アーカイブ所蔵

企画：埼玉銀行／監修：吉田洋一／脚本：大沼鉄郎、富沢幸男／演出：杉原せつ、九里洋二、富沢幸男／作画・アニメーション：久里実験漫画工房／音楽：松村禎三／音響：大野松雄  
 声の出演：熊倉一雄、河合坊茶ほか

埼玉銀行の創立20周年を記念して制作された、アニメーション映画。  
 現在私達の生活の中には、あらゆる数字が、そしてそれを利用した計算が、極く自然に溶け込んでいます。この数字や、その計算はどのようにして生まれたのでしょうか。また、「数字と計

2024年6月1日(土)・6月2日(日) 会場＝京都文化博物館 [3F フィルムシアター]

## 土くれ 木内克の芸術

1972年 | 18分 | モノクロ | 35mm  
 隆映社 国立映画アーカイブ所蔵



大野松雄 Matsuo Ohno

よる心の傷を被爆者の生活実態に則して描いた。「僕が広島、長崎を見て考えたことは、原爆や水爆を使ってまで守らなければならないものが、いったいこの世にあるのだろうか」、亀井監督の問題意識は深まってゆき、本作『世界は恐怖する』では“死の灰”、放射線の実態にせまるべく取材を開始する。

「流血の記録一砂川」以後の亀井作品に参加していた大野。「僕はあんまり人の影響って受けないタイプだけど、亀井さんは別格だった。すごく厳しい人だったけど、たくさん学ぶことがあったし一緒にやれたことは、ありがたかったですね」と話していました。

## 土くれ 木内克の芸術

1972年 | 18分 | モノクロ | 35mm  
 隆映社 国立映画アーカイブ所蔵

企画・製作：灰野健三、木下忠司、楠田浩之、喜屋武隆一郎、隆映社／脚本・演出：松川八洲雄／撮影：楠田浩之 JSC、喜屋武隆一郎／音楽：木下忠司／音響：大野松雄

ヨーロッパなどでは美術映画の製作が活発であるが、日本では不活発であると言える。この種の映画造りが活発にならない日本の素地というこ



©手塚プロダクション



©隆映社

とが問題ではあるが、作品そのものも概して記録ということに重点が置かれすぎて、映画であることが忘れられているように思う。その道の専門家が好事家でないとい角屈を感じ勝ちである。美術を紹介、理解させると共に映画の面白さがあって、一般の人をもその画面に誘い込むことがなければ、何時までも狭い内にとじこもらざるを得ないであろう。記録的な美術映画もより広く多くの人に観られるようにならなければならない。たまたま木内氏とテラコッタを映画として考えたのは、得難い芸術であり、記録として置くことの意義であることは勿論であるが、木内氏とテラコッタが映像として素晴らしい効果を示せるとイメージしたからである。しかし、まずは人間性豊かに創造を楽しまれる木之内氏に魅せられたからである。  
 楠田浩之(公開時のパンフレットより)